

『コワーキングというワークスタイル – ^{コラボレーション}協働による価値の共創』

北海道大学大学院 経済学研究科教授(北海道生産性本部 理事)
平本 健太(ひらもと・けんた)

略歴: 1964年新潟県生まれ。87年北海道大学経済学部経済学科卒業。91年北海道大学大学院経済学研究科経営学専攻中途退学、滋賀大学経済学部助教授等を経て、97年北海道大学経済学部助教授。00年北海道大学大学院経済学研究科助教授。07年北海道大学大学院経済学研究科准教授(呼称替え)。08年北海道大学大学院経済学研究科教授、現在に至る。
・学位: 博士(経営学)(北海道大学) ・専攻分野: 経営学(経営戦略論)
・主要著書: 『情報システムと競争優位』白桃書房、2007。『戦略的協働の本質—NPO、政府、企業の価値創造』(共編著)有斐閣、2011。他、論文多数。



コワーキング(coworking)をご存じだろうか。日本ではまだ、あまり馴染みのない言葉だが、近年急速に注目されつつあるワークスタイルである。日本初のコワーキングスペース「カフーツ」を神戸に開設した伊藤富雄によれば、コワーキングとは「個別に仕事を持つ人たちが、働く場所を同じくしつつコミュニケーションを図りながら、互いに情報や知見を共有し、時に協働パートナーとして貢献しあう」ことである。コワーキングする人がコワーカーであり、コワーカーが仕事をする環境(場)はコワーキングスペースと呼ばれる。

最近では、特定の場所を決めずにカフェや図書館などで仕事するノマド(遊牧民)ワーカーという言葉が耳にする。また、個別に仕事を持つ事業者やフリーランサーが仕事をする環境として、SOHO(ソーホー; small office/home office)も定着した。ノマドワーカー/SOHOとコワーカー/コワーキングスペースとの違いは、ひとりぼっちで働くのを前提とするか、誰かと協働するのを前提とするかである。ノマドは状況や気分で働く場所を転々とするが、そこで他のワーカーとのコミュニケーションが図れる保証はない(むしろ可能性は低い)。「わが城」であるSOHOは確かに快適な作業空間だが、ひとりで仕事をする孤独感に苛まれるとか、他人の目がないのをよいことにダラけることもありそうだ。

他方、コワーキングスペースの多くは、カフェやフリーアドレスのオフィスのように開放的な空間を備えている。オープンな空間だからこそ、他のワーカーの目を意識しつつ適度な緊張感を保って仕事ができる。オープンな環境だからこそ、コワーカーどうしが自由に会話したり、仕事のアイデアを交換したりできる(むしろ奨励される)。

プログラミングが得意なITエンジニア、尖った感覚を持つWebデザイナー、そして課題解決に長けているプランナーが、コワーキングスペースで協働して新しい製品やサービスを生み出すということが、すでに現実になっている。ひとつの典型例が、米国西海岸ベイエリアのコワーキングスペースで誕生したInstagramだ。Instagramは、スマートフォン向けの写真アプリ・SNSで

ある。2010年のサービス開始から瞬く間に成長し、18ヵ月後にはFacebookによって10億ドルもの高値で買収された。



Instagramのログインページ

コワーキングにおけるキーワードは、共有と共創である。自身が持つスキルや知識やネットワークを、自身あるいは特定の組織の範囲内で独占せずに、スペースで出会う多様なワーカーたちと共有することで新しい価値を共創する。これがコワーキングの本質だ。誰かの役に立ちたい、仲間と一緒に価値を生み出したいという人間の本質的なモチベーションを、そこに見てとることができる。

カネやモノは有限だ。だから、それらの奪い合いはゼロサムゲームだ。でも、知恵やアイデアは無限だ。だから、上手く組み合わせればプラスサムになる。コワーキングというワークスタイルは、無限のアイデアや知恵、相互補完的なスキルや技術を共有することで、新しい価値の共創を試みる21世紀型の知的営みである。

コワーキングの芽は、まだまだ小さい。だが幸いなことに、北海道にはコワーキングをサポートする仕組みが、全国に先駆けて存在する。SCS(札幌コワーキング・サポーターズ)である。北海道経済産業局、札幌市、北洋銀行、日本政策金融公庫、そして筆者の所属する北海道大学大学院経済学研究科という産官学が協働して、道内のコワーキングを多面的に支援するのがSCSの役割である。

北海道というフロンティア精神溢れる土地で、小さいけれども勢いを持つコワーキングの芽が大きく開花し、新たな社会的価値が生み出されていく。このことが今、大いに期待されている。